「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

ＮＯ．70
2019.10.1　発行

編集責任者：河地　清
Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第 70 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『芝炭鉱株式会社と経営者芝義太郎』

令和元年９月１日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ**『芝炭鉱株式会社と経営者芝義太郎』**で塚田忠雄（本会副会長、郷土史研究家）による標記テーマで講演が行われ、参加者は 49 名だった。中日新聞 8 月 24 日の近郊版記事として紹介されたことから初参加者が多く詰めかけた。

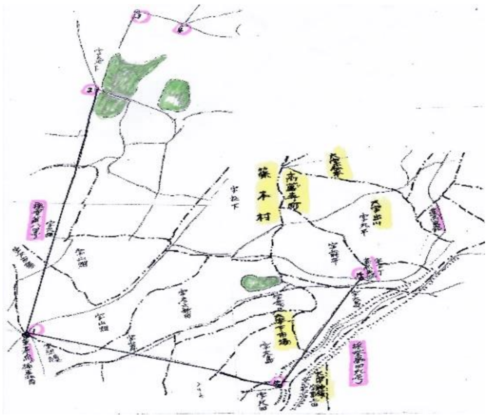
講演する塚田忠雄　氏

会場風景

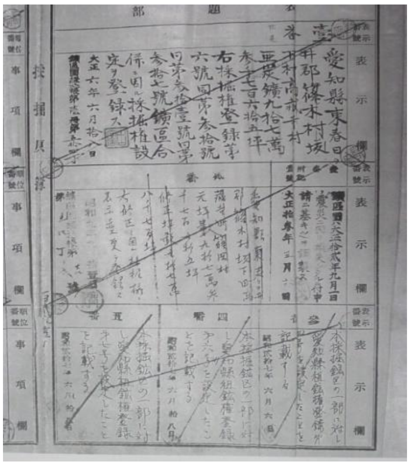
配布資料は、**「伝記『芝義太郎』からわかる芝炭鉱創設の芝義太郎の人生」**（10 頁、要約版 6 頁）と**「経済産業局で調べた芝炭鉱の鉱区図と鉱業権原簿」**（7 頁）で、これに加えて、当日は**スライド「芝炭鉱と芝義太郎」**（33 枚）が投影され、これをもとに進められた。

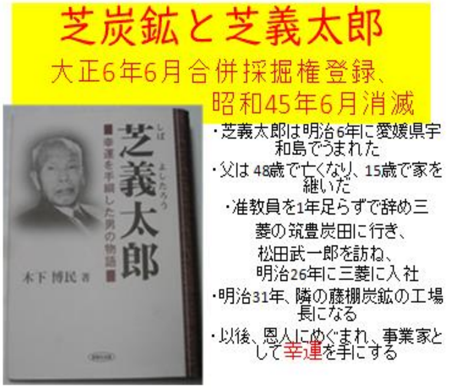
−発表要旨－

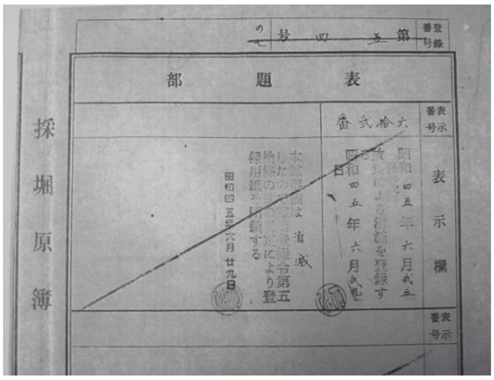
Ｉ．　芝儀太郎の伝記を誰も書かなかったので、愛媛県の同郷の木下博民氏（元伊豫明倫館館長）が「芝義太郎　幸運を手綱した男の物語」を 2006 年 10 月に出版した。今年 3 月にこの本にであった。偶然の出会いであった。400 頁を超える本から春日井の芝炭鉱に係わる部分、氏の経営者としての経歴と家族（一族）について、抜き書きしてみなさんに紹介した。スライドの 1 コマ目に大筋を書いているが、愛媛県宇和島で生まれ、生家没



落後、九州筑豊炭田の炭鉱員を振り出しに頭角を顕し、全国各地で炭鉱を開発経営し炭運輸で一世を風靡した後、東京機械製作所を経営した。その一方で、大正６年６月、春日井市高蔵寺町で、尾濃炭礦と尾張炭礦を取得して、芝炭鉱として合併採掘権登録をする。芝義太郎が設立し経営者となる。これまで尾張炭礦は大泉寺八幡社の参道入口の石に社名が刻まれながら、その実態は不明であった。今回初めて、農商務省鉱山局**「本邦重要鉱山要覧」**（大正 3 年、15 年出版）に、**長久手鉱山(尾張炭礦)**として載るのを国会図書館デジタルで発見した。愛知県の「重要鉱山(亜炭鉱)」としては他に芝炭鉱と**出川炭鉱**が載っている。芝炭鉱の鉱業代理人は岡村安一になっている。大正６年２月時点では、芝炭鉱は登録 30 号、31 号、37 号、6 号の鉱区を合併している。長久手鉱山は、この時点で芝炭鉱 93 万坪余に対し、163 万坪弱で、長久手・日進・幡山・東春日郡・旭に鉱山を展開していた。出川炭礦は 17 万坪弱であった。その直後、大正６年６ 月の芝炭鉱の合併はかなり大胆なものであったとわかる。(鉱区面積は統計により単位が a や坪になっているので注意)　春日井の亜炭鉱は、消費地に近く、高蔵寺駅まで馬車やトラックで国鉄中央線高蔵寺駅まで運搬し、東海道線で大垣へ、関西線で桑名などへ鉄道輸送できる利点があった。芝義太郎は、松田武一郎や長谷川芳之助の二人の恩人に助けられ、日本の産業革命の時期(明治 40 年頃まで)に様々な事業に手を出すが、最大の投資と経営は北海道雄別炭礦鉄道(北海炭礦鉄道)と東京機械製作所であった。前者は、炭鉱採掘事業ではなく、輸送のための鉄道事業であった。鉱山事業の危険をよく知っていたからだ。しかし、関東大震災の被害を機に、夢と冒険の事業をてばなした。後者は、明治 21 年、官営工場の払い下げでられたものを、第三の恩人皆川宏量の誘いで、雄別炭礦鉄道の売却資金を投じた事業で、4 代目皆川社長が体調を崩した後、昭和２年の金融恐慌後、芝義太郎を社長にした。芝義太郎は手持ち資金を賭けて引き受けた。いざという時に、芝炭鉱が切り札になると考えたからだ。**昭和 3 年**、54 歳で、人生の後半に賭けた。芝炭鉱は小さいながら、芝義太郎の人生の大きな賭けに役立った存在だった。明治 36 年以降、芝義太郎は「**独立経営時代**」にはいった。死ぬまで東京機械製作所の大正３年に北海道阿寒の山奥で北海炭礦鉄道(後、雄別炭礦鉄道株式会社)を興し、経営がつづいた。







Ⅱ　合併して**大正６年**６月 18 日に、東京市京橋区の芝義太郎が鉱区合併による**採掘権設定登記**がされた。ただし、関東大震災で焼失ので、大正 13 年５月６日に調整した。 私が個人的に中部経済産業局に出向いて得た鉱業権原簿の抄本を初めて披露した。当日の配布資料は「郷土史春日井５号」にも載せていないもので、上の鉱区図を含めて、歴史研究の１級史料で、大変貴重なものだ。全部で４万円の価値がある。**鉱区図**は閲覧し、トレースしたものを元に私が復元作成をしたもの。講演当日、昭和 44 年の「春日井地図」(アルプス社)をお見せした。これ自身も文化財的な価値がある。亜炭鉱の位置が書かれている。国土地理院勧修の地図で、他にはない。春日井市都市計画基本図もお見せした。

（記録：塚田忠雄）

OPINION(編集後記にかえて)

中日新聞　2019年（令和元年）8月24日（土曜日）

芝炭鉱の軌跡を調査

郷土史家塚田さん　春日井で来月講演会

かつて亜炭の産出量日本一を誇った春日井市。現在の同市出川町に本社を置き、採掘を担った芝鉱業（通称・芝炭鉱）について、市内の歴史を研究する「ふるさと春日井学」研究フォーラムの塚田忠雄さん(七四)＝同市神領町北一＝が調査結果をまとめた。九月一日に市内のささえ愛センターで講演する。塚田さんは「芝炭鉱については資料がほとんどなく、同社の軌跡を残す重要な調査となるだろう」と語る。（高岡涼子）

春日井市史によると、この地方で初めて亜炭が発見されたのは、江戸時代の安政年間（一八五四～六〇年）。一九〇〇（明治三十三）年に全国で初めて条例に基づいた亜炭の採掘が高蔵寺町で始まった。

塚田さんは中部経済産業局（名古屋市中区）で鉱業権などを登録した鉱業原簿のコピーを入手。付属する鉱区図も閲覧し、手描きで写した。

その結果、芝炭鉱の鉱区は、現在の東名高速道路春日井インター付近を起点に坂下町まで広がっていたことが判明。原簿の最後には一九七〇（昭和四十五）年六月二十五日の受け付けで「放棄による消滅を登録する」と記され、芝炭鉱が終幕を告げたことも明らかになった。

「産業局へ地名を頼りに原簿の閲覧を求めても断られた。研究フォーラムの二代前の会長が所持していた県知事への事業届『県道附近亜炭鉱業二付御願』に記されている採掘権登録番号が鍵。これが分からないと閲覧ができなかった」と入手の苦労を語る。

芝炭鉱の創業は一九一一（明治四十四）年。出川町の境にある金ケ口池のほとりに事務所を構えていた。しかし、事務所そばの竪坑跡など現存する炭鉱跡以外、事業の痕跡は残っていない。鉱区や芝炭鉱の消滅時期は創業者の伝記からしか分からず、確かな証拠となるものが今までなかった。

塚田さんは「芝炭鉱を経営していた芝一族は、いわゆるお家騒動で分裂していた。そのため、炭鉱に関する資料が後世まで残らなかったのではないか」と理由を推測する。

現在、出川町の竪坑跡は竹林に覆われてその姿を見ることはできない。そのすぐ東にある公園「前平ちびっ子広場」が二〇一五年に陥没し、その場所にも竪坑があったことが分かった。

塚田さんは「亜炭は春日井の産業を支えた大事な要素。その歴史的価値を見直し、炭鉱跡の保存と継承をしていくべきだ」と訴える。

上　現在は建設請負会社の敷地となっている芝炭鉱事務所跡地。左側の竹林が竪坑跡＝春日井市出川町で
下　鉱区図の写しを指さし「この場所に芝炭鉱の事務所がありました」と話す塚田さん＝同市下市場町３で

亜炭　「井屑(いくず)」や「岩木」「川木」などと呼ばれる褐色の燃料。１９００（明治33）年に「亜炭」と名称を統一された。太古の木が地中で炭化してできる。炭化度合いが低く、不純物や水分を多く含むため発熱量は小さいが、火付きが良いことから家庭用燃料として重宝された。市内では高蔵寺町や出川町で多く採掘された。戦時中の燃料不足を補うために採掘が盛んになったが、石油などの普及に伴い姿を消した。

中日新聞掲載記事（令和元年８月 24 日）

配布資料「伝記『芝義太郎』からわかる芝炭鉱創設の芝義太郎の人生」(「春日井郷土史」(紀要)　第４号 2018) に 『芝義太郎』が具体的に春日井地域での炭鉱経営をどのように行ったのかが紹介されているので紙数の許す範囲で紹介しておきます。

第３章の「山師として奮闘」に芝炭礦設立のこと

芝義太郎は、水上の小日向鉱山で一家と苦闘していたさなかにも、鋭敏な触覚を生かして、全国の鉱山情報を得ていた。鉱区の売買はもちろん、ときには投資もやれば投資もやれば、格好の鉱区があれば自ら経営するといった八方睨みのまいにちであった。… 鉱山は、株取引とは違う。あくまで本業だったが、ときには思わぬ失敗もした。羽前炭礦事件もその一つであった。1919（大正８）年の暮れ、創立趣意書を見て、資産株のつもりで 500 株を引き受け筆頭株主になる。経営する地元名士の顔を立てるつもりであったが、設立登記以前に、株主総会にも諮らず、多額の債務があった同社を買収し、営業もしないうちに倒産させてしまった。計画倒産する詐欺行為に引っかかってしまった。告訴したが解決には数年かかった。この事件の少し前、1917（大正６）年に、小日向に製錬所を造った。同時に、春日井市高蔵寺にも、尾濃炭鉱と尾張炭鉱を取得、併合して芝炭礦を設立、みずから経営した。この亜炭鉱は、消費地を間近にひかえた立地が幸いして、義太郎の事業の一つとなった。と出てくる。（P107）第 10 章に「芝家の家業芝鉱業」が書かれており、「書き洩らし」を補っている。義太郎は活動の舞台を、九州からいきなり大阪や名古屋を飛び越えて東京へ移したことなど、あまりにも唐突で、しばらく書きすすめるのを躊躇したほどであったと書いている。病母に逆らって、大胆な相場に手を染め、大損をすると、さっさと家族を引き連れて、群馬県水上の鉱山に逼塞する。乱暴と思われる一時期がつづいた。ところが、いかに再起を危ぶまれるときにも、本人が意識する、しないにかかわらず、<u>義太郎はガッチリ切り札だけは持っていた</u>。それが、1917（大正６）年以降、愛知県東春日井郡高蔵寺村、篠木村、坂下村にまたがる亜炭の 4 鉱区を取得して１鉱区とし、施設に統一的革新を加え**芝炭礦株式会社**したのがこれである。あきらかに芝家の家業であった。(P107)１９１８（大正７）年 12 月発行**『本邦重要鉱山要覧』**によると、<u>芝炭礦は、鉱業権者芝義太郎、同代理人芝茂義</u>、採掘登録愛知県第五十四号、鉱区面積９７万３７６５坪とある。

…高蔵寺で燃える石が発見されたのは、１８５４～９（安政元年～６）年ころであったとか。土地所有者が勝手に採掘していた。鉱業法の適用を受けるのは１９００（明治３３）年で、需要に添って個人または会社組織で数鉱区が生まれ、経営されていたものを、義太郎が一括取得した。買収当時の写真が載る。需要は家庭の薪炭用だけではなく、名古屋、一宮、瀬戸方面へ送られて、食品・繊維・陶磁器工場の燃料にも使われた。**『本邦重要鉱山要覧』**には「鉱区は、名古屋市をへだたる東北三里二十町にして、多治見へいたる坦々たる県道がこれに通じる。名古屋へはこの県道から搬出し、鉄道は中央線勝川駅と高蔵寺駅との中間で、前者へは県道から約二里半、後者へは郡道（村道）から約三十町あるが、汽車積みは道路の関係上（初期には）勝川駅を使う」とある。濃尾平野のなかほどで、岐阜県と接した春日井市、こんにちでは名古屋のベットタウンという至便の位置であった。」当時このあたりの国鉄中央線の駅は、勝川と高蔵寺以外はまだなかった。**地層**は、地表から十尺ないし二百四十尺までにローム砂礫層、砂層、粘土層の順になっていて、粘土層の中に亜炭が胚胎し、色

は茶褐色、灰色、または白色で、火持ちがよかった。**炭層**は二尺炭、三尺炭、六尺炭の三層、採炭中の六尺炭は上下二枚で、その間に一・五尺ないし五寸の中土を帯びているが、これも挟煤層で燃料に適していた。炭層の拡布状態は、地表の起伏で多少異動しているが、おおむね三、四度の傾斜をなして、走向は二百七十度、断層はほとんどない。**採炭、運搬**などについても、『本邦重要鉱山要覧』にある程度記述されていて、小規模経営である。男子鉱夫は二百人前後、ときには女子も十人ほど使った。大正末期の資料では、炭鉱住宅九棟（戸数十九、室数二十二、居住者五十、電灯使用住宅九、他は石油ランプとある）福利増進と称して、鉱夫資金の幾らかを銀行預金にし、娯楽慰安では、汽車賃と弁当を与えて、春の花見をさせた。まれには、芝居や相撲を催し、鉱夫家族ともに無料で見物させたとある。(P372)
前に、短鑛業は、元来輸送という付加価値あっての業であると述べたが、ここの亜炭は、九州や北海道とは違って採掘も容易であり、しかも輸送はさらに簡単、周辺需要者の家庭、家内工業へ向けて配送すれば事足りた。初めは荷馬車を使った。汽車積みでは、高蔵寺駅から桑名、名古屋、岐阜へ運んだ。昭和に入ると事業は増大し、出川から名古屋の堀川まで運炭鉄道を計画したこともあったが、労働争議のため実現しなかった。戦中戦後の燃料不測の時代には、名古屋工業地帯の希少な燃料庫であった。大きな飛躍は望めないまでも、着実な経営を続け、芝家の切り札的な役割を十分果たしていたのである。１９３１（昭和６）年、社名を「芝炭礦株式会社」（資本金五十万円）と改めた。役員は、**社長芝義太郎、専務取締役岡村安一**（長女彰子の夫）、取締役穂積達、監査役勝田實（二女春江の夫）、同芝周平（三男）、とすべて一族で固められていた。この会社には、**弟の芝茂義、長男轍一郎**らもつぎつぎと就任しているが、あくまでも家族の逸脱する役員はいなかった。**販路**にしても、ときには芝義太郎自身が営業を行っている。１９５２（昭和２７）年３月２０日付芝義太郎の書簡によれば、三菱重工業常務の有川藤太郎に、亜炭を使ってほしいと当時の芝鉱業常務芝茂義にわざわざ自筆の紹介状を持たせている。有川藤太郎の父有川広は六原会の一員で、義太郎とは懇意であり、三菱重工業の社長郷古潔はさらに親しい。東京機械製作所が戦時中、三菱重工への工作機械納入先でもあったなどのコネを使ったのである。義太郎の没後、芝鉱業の社長には未亡人**梅子**が座った。実際には現地に**茂義**がいたのだが高齢のせいか、あくまでも梅子の補助者の役割を演じていた。まさに家業の姿といえよう。**租鉱権**のみを行使し、加藤某に採掘させた。石炭から石油に急速に移行する時代が到来していた。しかもこのとき、芝鉱業に壊滅的打撃をあたえる大事件が起こった。１９５９（昭和３４）年９月２６日、史上最大の被害を招いた**伊勢湾台風**が、午後６時２０分潮岬に上陸、北北西に進んで翌午前１時、日本海に抜けた。死者５０４１名、被害家屋５７万戸の被害。元来芝鉱業の亜炭鉱は、切羽が浅く、浸水水没の危険は大であった。加藤が殉職し、再起不能なまでの被害を被ったため、芝茂義は退社して守山に移り、轍一郎の長男**謹一**に管理させた。以後も、坑内はしばしば浸水して、採掘者も次第に減ってしまった。芝家事業の相続者三男**芝周平**が、１９９７（平成９）年４月１３日に亡くなったのを機会に、８０年にわたって芝家を支えつづけた芝鉱業も、つに解散整理された。（～P374）　　　　　　　　　　（文責：河地　清）

第７１回

ふるさと春日井学研究フォーラム

Forum テーマ：『ふるさと春日井のまちづくり』

―上街道と味美の成立―

講　師：岩田鎮人　氏（生涯学習講師）

日　時：２０１９年 11 月３日（日）　午後１時３０分～４時

場　所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）

２階 TEL：0568-56-1943（〒486-0837 春日井市春見町３番地）

※（非会員の方のみ資料代 500 円当日徴収させて頂きます。）定員 80 名（定員で〆切ります）

※申し込み　事務局：〒486-0825　春日井市中央通り 2-9　TEL・FAX0568-82-5973　会長　河地　清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp かすがい市民活動情報サイト：http://kasugai.genki365.net/

ふるさと春日井学検索